

大橋正夫教授を偲んで

塩田芳久

大橋さん、あなたは、なぜわたしどもを残して、こんなにも早く逝ってしまわれたのですか。神の思召しとは申せ、わたしどもにとっては、あまりにも厳しく悲しい現実です。痛恨という言葉をもってしても、なお、わたしたちの悲しみを表わすことはできません。

大橋さん、あなたとの思い出は数かぎりありません。静かに目を閉じると、お城の兵舎跡の研究室で毎日のように頑張った共同研究のこと、楽しかった研究旅行のこと、福井の新居をお訪ねしたときのこと、夜の更けるのを忘れて囲碁を楽しんだこと、など、など、あなたとの思い出は尽きません。

あなたとわたしの関係は、師弟というよりはよき研究仲間であり、よき友人であり、またよき相談相手でもありました。

もしも、わたしが人生の先輩として、あなたの人生に何らかの影響を与えるところがあったとすれば、それは、あなたを心理学研究者に向かわせる一つのきっかけをつくったことと、いま一つは、あなたの唯一の趣味ともいうべき知的ゲームの囲碁の手ほどきをしたこと、ぐらいではなかったかと思われます。

いつの頃だったか、「わたしが心理学に興味を覚えるようになったのは、教養部で先生の教育心理学の講義を受けてからのことでした」という意味のあなたの言葉を聞いたときの、面映いなかにも大きなよろこびを感じたことを、今もはっきりと思い起こすことができます。わたしの講義の中で、大橋さんの関心をとくに引いたのは、モレノのソシオメトリに関する研究の紹介だったということでした。

当時は、戦後間もないこととて、思うように参考文献が入手できず、原著に当ることもなく、いわゆる孫引き資料によらざるをえなかったのですが、大橋さんは、学部進学後間もなくこのモレノの原著（J. L. Moreno, Who Shall Survive?）を苦勞して入手され、わたしに貸してくれたことを覚えています。大橋さんの社会心理学ことに対人関係に関する研究は、この頃から始まったと申せましょう。

大橋さんが、理学部数学科から教育学部に転学部してこられたことについては、あまり知られてないかもしれません。

大橋さんとわたしの研究仲間としてのお付き合いが始まったのは、大橋さんが学部を優秀な成績で卒業され、直ちに助手として教室に勤務されるようになった頃からでした。助手の勤務一年の間に、大橋さんは研究者として進むべき道をいろいろと学ばれたに違いありません。翌年大学院への進学を決意され、雑務から解放されて、あなたはいよいよ本格的な研究活動に入られることになりました。それは、わたしにとっても嬉しいことでした。

大学院に進まれてからも、あなたは、わたしのよき共同研究者として積極的に協力してくれました。当時、教育心理学教室では、継続の共同研究課題である「家族関係と人格形成」の研究に、依田 新教授を中心に教室あげて取り組んでいましたが、その分担課題としてわたしどもは「親・子の期待・願望と子供のパーソナリティ」の研究を取り上げました。また、続けて「同胞関係の心理学的研究」、さらに「教育心理学的診断の予見性に関する追跡研究」なる共同研究のうち「交友関係調査」を分担しました。これらの共同研究の成果は次々に学会で発表され、大きな反響を呼びました。わたくしどもの分担課題の研究に対しても多くの人びとの関心が集められましたが、この成功の大半は、大橋さんの尽力によるものでした。

この間、大橋さんが自身の研究課題である「選択行動と対人的知覚の研究」に鋭意取り組まれていたことは申すまでもありません。その成果は、3編の論文として日本心理学会誌「心理学研究」に次々と発表されました。これらの研究を基礎に、後に博士論文をまとめられ、昭和38年2月に見事教育学博士（課程博士第一号）の学位を授与されました。

博士課程単位修得退学後間もなく、あなたには二重のよろこびが訪れました。一つは、福井大学の教育学部から講師として招かれたこと、二つめは、あなたの人生のこよなくよき伴侶の典子さんを射止められたことでした。これらの出来事は、あなたの新しい人生への出発点でもありました。

大橋さんが福井大学に勤務されるようになってからは、わたしどものお付き合いが疎遠になりがちであったのは已むを得ないことでしたが、それでも、あなたは、研究会などの機会をとらえてしばしば帰名され、教室を訪ねてくれました。わたしの自宅まで態々足を運んでくれたことも幾たびかありました。そのたびごとに、あなた

の人柄が、人間として次第に大きくなっていることを感じとり、秘かによろこんでおりました。

数えると、あなたの福井在住は10年にもなります。この福井大学での10年間に、あなたは、研究者としてまた教育者として、さらには一家を構える社会人としてさまざまな貴重な体験を積み重ねられたことと思います。かつては、知的聡明さと鋭敏さが目立っていたあなたでしたが、それに人間としての幅とゆとりが加わって、一回りも二回りも大きくなりました。こうしたあなたに、研究・教育者として将来の大成を期待していたのは、わたしひとりではありませんでした。まことに残念でなりません。

大橋さんが、福井時代に勉強して大いに腕前をあげられたものの一つに囲碁がありました。手合せごとにわたしとの差は縮って、最近ではほぼ互角にまでなっており

ました。病院にお見舞にいったとき、わたしの手を握って「早く元気になって、先生と碁を打ちたい」といわれた、あなたのあの言葉は、わたしの心の奥深くにいつまでも残ることでしょう。

大橋さんが母校の名古屋大学に帰られてからのことについては、長くなるので省かせていただきますが、ただ、至らぬわたしを助けて、研究に教育に、また学科や学部の運営に力を貸してくださった、あなたのご厚誼には感謝の言葉ありません。

大橋さん、公私にわたりいろいろと本当に有難うございました。これが最後のお別れかと思うと涙がでてとまりません。

大橋さん、安らかにお眠りください。

(昭和58年11月23日)